

着替えて部屋を飛び出した。

外はまだ薄暗い。雨は夜半過ぎに上がっていたようだ。濡れたアスファルトの上を駆けた。走り出してすぐ、部屋の鍵をかけ忘れたことに気づいた。が、戻る余裕はない——時間的にも、精神的にも。

そのまま走った。

——とおりゃんせ

手がかりはあまりに乏しい。

私の考えつく限り、城戸が電話をかけてきたと思しい場所は二ヶ所だけだった。

一ヶ所は、私の家から北に三キロほど行ったところにある小さな交差点で、商店街のあいだを抜けている。

もう一ヶ所は、J Rの駅から下り方向へ——新陵高校のほうへ——しばらく行ったところで、学校の最寄り駅からさらに二駅ほど先にあつた。しかし、そこは通勤ルートの手先であり、馴染みはない。その信号が果たしてほんとうに「とおりゃんせ」を奏でていたかどうか、よく覚えていなかった。

前者のほうがずっと近い。しかし、城戸や男が新陵高校のそばのC公園近くにいたことを考えると、後者である可能性が高かつた。無論、まったくべつの信号だということもあり得た。しかし、それを考え出せばきりがない。J Rの駅前には、少ないながらも行き交う車があつた。ロータリーの真ん中にある時計を見ると、五時半になろうとしているところだつた。

駅の構内に駆け込んだ。始発電車は出たばかりで、次の電車までには、まだ二十分あまりの時間があつた。舌打ちして駅から出た。ロータリーの周囲を見回す。向こうの通りを一台のタクシーが通りかかつた。私は手を振りながらそちらへ飛び出した。

私の剣幕に驚いたかのように、タクシーはタイヤに悲鳴を上げさせて停車した。怪訝そうな顔で見返す運転手は中年の女性だつた。彼女に行き先と急いでいることを告げると、ますます怪訝そうな顔をした。しかし、私の要求は叶えてくれた。タクシーは、明け方の街を疾走した。

タクシーを降りてみて、やはり間違ひではなかつたか、と思い始めた。そこは、シヨップ・ピング・センターや自動車のショールーム、紳士服店といった郊外型の店舗が並ぶ通りだつた。

ごく当たり前の生活がある、ごく当たり前の街だつた。そんな街角は、今の城戸真澄にふさわしくないように思えた。あまりにも日常的、あまりにも

平凡、あまりにも安逸な、あまりにもふつうのありふれた街角だった。

こんな通りを見ながら、果たして自分が死んだことを友に告げられるだろうか？

メロディが耳に飛び込んできた——「とおりやんせ」だった。

周囲を見回す。信号。シヨッピング・センターの駐車場のすぐ前の交差点に立っている。

電話では、かなり小さい音で「とおりやんせ」が聞こえていた。つまり、城戸が電話で話していたのは、この信号から少し離れた場所なのだ。

私は公衆電話を探した。

電話があつてから、もう一時間以上たつていた。日もじわじわと明るさを増し、街全体が本格的に目覚め、活動を開始しようとしていた。道路を走り去る車の数も徐々に増えていた。もはや街は夜の闇を抜け、光の領域に踏み込んでいた。昇りつつある太陽の薄明かりさえもが、私にはまぶしすぎるように思えた。

ようやく、一台の公衆電話を見つけた。シャッターの下りた酒屋の前、自動販売機の陰に隠れるように、それはひっそりとたたずんでいた。

私は受話器を上げてみた。だからといって、何がわかるというわけではなかったが。しかし私は根拠もなく確信していた。この電話で、城戸は私に最後の言葉を語つたのだ。

最後の言葉——その意味するところに気がつき、改めて驚きを感じた。そうだ。あの電話は、ただの挨拶なんかではない。城戸の遺言だったのだ。

城戸、おまえはもう私の手の届かないところへ去ってしまったのか——

思いを振り払い、公衆電話の受話器を叩きつけた。

どっちだ？ 城戸は、この電話からどちらへ行つたのだ？

眼に飛び込んできたのは、橋だった。緩やかなアーチを描く橋が、向こうの道路上に朝日を背にシルエットとなつて見えた。歩道橋だった。ただの無味乾燥な歩道橋ではなかった。すぐ脇の緑地公園への連絡橋となっている、装飾の施された橋だった。

そのたもとに、人影があつた——ように見えた。

私は、引きつけられるようにそちらへ向かった。我知らず、歩調が速くなつていく。しまいには、駆け出していた。

偶然とは、不意に外部から訪れるものばかりとは限らない。偶然のなかに

は、自らが呼び込むものもあるのではないか。

そのときの私は、偶然を我が身に引きつけることができたのに違いない。私がいるのとは反対側の歩道に、橋の階段を背にして立っている男が見えた。思わず私は立ち止まった。

脚が動くことを拒否していた。それ以上先へ進めなかった。

505号室の男——私に気づいた様子はなかった。しかし男は、私にも感じられるほどの緊張感を全身から発していた。あるいはそれ「殺気」と呼ぶのかもしれない。長身を季節外れの丈の長いコートで包み、じつと通りの向かい——ちょうど私の正面前方——に顔を向けていた。サングラスが男の両眼を隠していたが、そちらを凝視していることはわかった。男の視線を眼で追った。

と同時に、鋭い声が飛んだ。

「それ以上近づくな！」

私をにらみつける城戸真澄の表情は、尋常ではない険しさと厳しさに張りつめていた。彼のこんな表情を、私はかつて一度も見ることがなかった。

「……城戸！」

私は気圧されながらも、前方にいる城戸のほうへ一歩踏み出した。

「近づくなと言った！ あと一歩でも来てみる。ただじゃすまねえことになる」

その言葉は、単なる威嚇以上の凄みを秘めていた。

それでも私は、城戸へ歩み寄っていた。歩み寄らずにはいられなかった。

「城戸、いったい何をしよう——」

「忘れろと言ったはずだ！」

城戸の眼がいつそう鋭くなった。その視線に耐えられず、私は思わず眼をそらして道路の反対側にいる男を見やった。男は、私の存在そのものにいささかの興味も抱いていないのか、先程とまったく同じ姿勢で城戸を凝視していた。

城戸と男のあいだの車道を、大型トレーラーが通過していった。

その轟音と振動が治まると、以前にも増した静寂が鼓膜を圧迫した。

私たちはしばし、誰も口を開かなかつた。私は城戸を見つめ、城戸は男をにらみ、男は城戸を見返していた。

「馬鹿だったよ。俺が、馬鹿だった」

通りの向かいの男に眼を向けたまま、城戸はつぶやくように言った。

「その台詞は、おまえらしくないな」

私は明るさを装った。

「おまえを巻き込みたくはなかった。まさか、ここまで追いかけてくるとは思わなかったよ。が、元はと言えば、くだらねえ感傷に負けて、おまえに電話なんかしちまった俺のせいだ」

男は動かなかった。まるで蠅人形のように微動だにせず、城戸を見続けた。男の耳にも城戸の声は届いているのか。

何かを振り切るように、城戸が顔を上げた。そして、私の顔をじつと見た。

城戸が私を直視したのはこれがはじめてだった。

「見届けてくれ」

城戸は低い声で、しかしはつきりと私に向かって言った。それは一種の命令であり、宣告のようだった。

「何を……？」

私の問いはむなしく宙に消えた。

城戸はしわだらけの戦闘服様ジャケットの裾をまくり、その下に手を突っ込んだ。通りの向こうに眼を向けると、男もまた同様に、コートの下に手を入れていた。

二人はほぼ同時に手を出した。二人の手には、ともに黒光りする物体が握られていた。私は眼を疑った。

城戸は慣れた動作で右手の黒い金属の塊からシリンダを出し、そのなかに収まっているものを確認した。それから城戸は表情も変えず、器用にシリンダを片手で回転させ、手首のスナップで黒色の塊本体に戻した。

かちやり、という金属音が聞こえた。決して大きくはないその音に、私は身を縮めた。

城戸はもう私を見ようとはしなかった。ただじつと通りの向かいの男を凝視していた。男もまた黒色の塊を手を下げ、じつと城戸を見返している。

二人とも動かなかった。

私も、身動きすることができずにいた。我々三人のいる一帯の空気が、いつしか剃刀と化していた。うかつに動けば、容易に切り裂かれる。

これほどの緊迫した空気を、私はかつて呼吸したことがなかった。強いて思い起こすなら、高校時代、弓道の的前に立ったときの緊張感に近かった。弓をいつぱいに引き絞り、的を狙う。眼は半眼になり、呼吸は浅くなる。矢を放つのではない。矢が放れるのだ。その期が熟すまで、弓を引き絞った

姿勢のまま——いや、永遠に引き絞りながら、精神を限りなく無の状態にする。それを弓道の言葉で「会」といった。

今、私の眼の前にいる城戸と男は、まさに「会」の状態にあった。しかし、今私たちを取り囲んでいるこの緊張感、高校生だった私たちが体験していた「会」とは比べるべくもなかった。

ここには、生と死のせめぎあいがあった。その微妙な均衡が、頂点を越えて炸裂する時期を待っている。

車道を通る車はなかった。仮にあったとしても、このすさまじく張りつめた空気を引き裂くことなどできないだろう。

そのとき、聞こえた。

風に乗ったその旋律が、私たち三人のあいだに漂った。冷たく、硬く、鋭く研ぎ澄まされた空気分子の間隙を抜けて突き進んできたものがあつた。その旋律はあまりにも軟らかく、あまりにも静かに私の鼓膜を揺るがした。

——とおoryんせ、とおoryんせ。ここはどここの細道じゃ……
動いた。

どちらが先、というわけではない。城戸と男は、まるで互いに合図でもしあつたかのように、背後の歩道橋のほうを振り返つた。

——天神様の細道じゃ……

二人が同時に階段を駆け上がった。その動きは獲物を追う肉食獣の敏捷さを思わせた。車道を挟んだ二人の姿はあまりに似ていた。一方が一方の鏡像のようだ。そうなのだ。二人は、ある意味で同じ一種の人間だった。

——ちよつと通してくださいゃんせ。ご用の無いもの通しやせぬ

階段を上りきるのも、二人同時だった。そのとき、歩道橋の左右の端で二つの体が沈んだ。その体は手すりに隠れ、一瞬見えなくなった。二体の獣が、敵に襲いかかるべく身構えたのだ。ちよつとネコ科の肉食獣が背中を丸め、今まさに相手に飛びかからんとするように。しかし狙うべき相手は草食動物ではなかった。自らと同じ獯猛な獣なのだ。

——この子の七つのお祝いに……

歩道橋の手すり越しに、滑るように接近する二つの体が見えた。双方とも、片手を前にかざしている。

近づく。

限界まで近づく。そんな二人を、私は立ち尽くして見守ることしかできなかった。さらに二人は近づく。

——お札を納めに参ります……

二発の銃声は、ほとんど同時に起こった。

がくん、と沈み込んだのは城戸だった。私はあえいだ。私の体に銃弾が撃ち込まれたかのごとく。胸の奥に痛みすら感じた。

しかし城戸は倒れなかった。体を低くし、さらに男に近づいていた。

その直後、二人の体は重なった。しかし彼らは互いに触れあうことはなかった。次の瞬間、二人は体を入れ替えた——互いの面を打ち合った剣士のように。二つの体が離れた。男はいっぱいに腕を伸ばした。城戸を狙った。城戸の動きが遅れた。

——行きはよいよい……

しかし男の体勢も整ってはいなかった。腕が揺れた。その隙に、城戸も構えた。ジャケットの裾がひるがえった。

——帰りは……

そこで、かき消すようにメロデイが消えた。

駆け出したいという衝動を必死にこらえた。が、歩道橋上の城戸のそばに駆け上がりたのか、それとも背を向けて逃げ出したいのか、自分でもわかっていなかった。どちらも許さないほどの殺気が、私を凍り付かせていた。

二度目の銃声。やや遅れてさらにもう一発。

先に撃つたのは男だった。しかし二つの体が揺らぐのは同時だった。揺らぎながらも、城戸が一步踏み出した。男の体がふらふらと後ずさった。

そして城戸が撃った。

男の体がのけぞった。何かに突き飛ばされるように、男の上半体が大きく後ろにしまった。

さらに撃つ。男は引きずられるように、そのまま後ずさった。城戸は腕をまっすぐに伸ばし、さらに前へ踏み出した。

そして、撃つ。

男がまた、がくん、と体をのけぞらせた。いつしか男は、歩道橋の端へ追いつめられていた。城戸の足どりはしつかりとしていた。

男の動きが止まった。もう後ろはなかった。男が顔を上げた。口を開いたように見えた。声は聞こえなかった。あるいは何かを城戸に向けて言ったのかもしれない。それを聞くことのできたのは、城戸だけだった。

階段の直前にで、かろうじてバランスを保って立っている男の前に、城戸が近づいた。男の顔つきは変わらなかった。能面のような無機的な表情で、

迫る城戸を見つめていた。城戸は揺るぎない足どりで前進し続けた。

城戸が立ち止まったとき、城戸の伸ばした腕の先は、男の体に触れんばかりになっていった。

しばしの静寂。城戸は動かなかった。男も微動だにしなかつた。私も歩道橋の下で、二人を見上げるだけだった。

男がゆっくりと首を動かし、その右手を——そしてそこに握られた凶器を見た。まるで、そこに自分の手があることを、今思い出したかのように。

男が城戸に向き直った。二人は、またにらみ合った。あまりにもよく似通った二人が。

見届けてくれ、と城戸は言った。

私は充分に見届けた。城戸と男の生死をかけた対決を、決闘を、私は見届けたのだ。城戸が勝利するのを、私は見届けた。

「城戸——」

呼びかけようとしたまさにそのときだった。男が動いた。城戸は私のほうを向きかけていた。反応が遅れた。男は腕を伸ばした。漆黒の塊を握った腕を。

私は眼を閉じていた。

しかし、銃声だけは否応なく私の耳に飛び込んできた。それを聞かずにすまずことはできなかつた。

銃声の残響が頭から去つても、私はすぐに眼を開くことができなかつた。最初に眼に飛び込んでくる光景を恐れた。

祈るような気持ちで眼を開いた。

眼の前の歩道橋のたもとに、それがあつた。覚悟を決め、ゆっくりと歩み寄つた。

505号室の男は、死んでいた。

歩道橋の上から階段を転がり落ちてきたにも関わらず、男のサングラスははずれずに、いまだにその表情を隠していた。ふと、サングラスを取り去つてみたい、という気持ちが頭をよぎつた。が、よぎつただけだった。

屍体から無理に眼を引き離し、顔を上げた。階段の上から、城戸が私を見下ろしていた。私は屍体をまたぎ、階段を駆け上がった。と同時に、城戸が身をひるがえした。

歩道橋の上に着くと、城戸が反対側の階段に向かうところだった。

「待つてくれ！」

私は怒鳴った。それは必死の叫びだった。

城戸は立ち止まった。私に背を向けたまま、階段への一步を踏み出せずにいた。が、私を振り返ろうとはしなかった。

私はその背中に言った。

「城戸……あの男は……」

城戸は答えなかった。ただ背中では私の問いを受けとめただけだった。城戸へ向かって一步近づこうとしたとき、いきなり彼は振り返った。

腕をまつすぐに私に向けて。手に握られた黒光りする塊は、あやまたず私の体の中心を狙っていた。

「それ以上近づくな！ 一步でも近づいたら撃つ！」

城戸の眼は、その言葉が本気であることを物語っていた。かつて高校時代に、的を狙って弓を引き絞ったときの眼、「会」の状態の眼にほかならなかった。

「馬鹿なことは……やめろよ」

私は声が震えないよう努力しながら、精一杯の虚勢を張った。

「これが、今の俺なんだ。俺のやり方なんだ」

城戸は、何かを吐き捨てるように言った。苦痛に満ちた声だった。まるで城戸が吐き捨てようとしたものが、彼自身の体の一部であるかのように。

「城戸……この十年のあいだに何があったんだ？」

「俺は城戸じゃねえ。城戸はくたばりやがった。俺が殺した」

城戸は喉の奥から声を絞り出した。

「もういいじゃないか。僕自身、おまえや、さつきの男と一緒に領域に足を踏み入れちまったんだから」

「それは違う！」

城戸は声を荒げた。私が何も言い返せずにいると、彼はやや口調をやわらげた。

「おまえを巻き込んだことは、すまなく思ってる。けれど、おまえは決して俺たちの同類にはなれねえし、なつちやいけねえんだ。そもそも生きてく道が全然違うんだ。おまえの道と、俺の道が交わるなんてことがあっちゃいけなかったんだ」

「でも、交わったんだ。あの日の夕方、あの公園で」

「そのときに、すぐに消えるべきだった。どうして消えずに次の日もあそこ

に残ってたんだろうな……」

城戸は静かに独り言のように言った。

「城戸、僕は……」

震える私の思いを乱暴になぎ払うように、城戸は私をにらみつけた。

「やめろ。何も言うな。俺はもう戻れねえんだよ。俺たちは、野犬みたいなもんだ。誰にも尻尾を振らねえし、誰にも飼われねえ。しかしその代わりに石もて逐われることもある。そういう薄汚え野犬は、野犬だけの薄汚え道を歩くもんだ。おまえらの進むきれいな道を歩くわけにはいかねえんだよ」

「きれいな道……?」

「おまえにはわかるはずだと思うけどな、牧」

城戸がはじめて口にした私の名に引き寄せられるように、私は彼のほうへ足を踏み出していた。

しかし、城戸の声が飛んだ。

「来るな！ 俺に撃たせるなよ」

照準は間違いないく私の胸に定められていた。まっすぐに伸びた腕は微動だにせず、表情は石像のように冷静だった。たとえ標的が私であろうと、城戸が決して狙いはずさないことは、私にはわかった。

「待てよ、城戸。もう弾倉は空っぽなんじゃないのか?」

私は、精一杯に強がってみせた。

「試してみるか?」

城戸の声は冷ややかだった。

「……やめとくよ」

「そうだな、おまえらしいよ。賢い選択だ」

城戸はゆっくりと腕を下げた。

もはやこれ以上、城戸に近づけないことがわかった。私と城戸は今、同じ橋の上に立っている。しかし実は、決して渡れない激流の兩岸で向かいあっているのだった。

それでも、言葉なら対岸の城戸に届かせることができた。

「城戸、行くなどは言わない。けれど、教えてくれよ。おまえは、これからどうするんだ?」

「野犬狩りに遭わねえようにするさ」

はじめて城戸の顔に、笑みのようなものが浮かんだ。城戸は戦闘服の袖をまくり、腕にはめたミリタリー・ウォッチを見た。

「朝飯抜きで今から走りや、間にあうぞ。二日連続で遅刻つてのもまずいだろう。さあ、行けよ。おまえの生徒たちが待ってるんじゃないのか？」

そう言うや否や、城戸は踵を返した。

彼の背中に向かって、私は声の限りに叫んでいた。

「城戸！」

城戸は動きを止めた。私に背を向けたまま、半分だけ顔をこちらに向けた。しばしの間があった。私は唾を飲み込み、息を吸い込んだ。城戸の背中をじつと見た。これが、城戸真澄という男と話す最後の機会だとわかったから。

「……死ぬなよ」

それだけしか言えなかった。自分自身でも、馬鹿げた台詞だ、と思った。「努力するよ」

城戸は静かに、しかし力を込めて答えた。

それが、最後だった。

城戸はそのまま階段を駆け下りていった。その姿は私の視界から消えた。思わず、私も走り出していた。城戸とは反対側の階段に向かった。

階段を一步下りたところで、私は啞然として立ち止まった。

男の屍体が消えていた。その痕跡すらなかった。

その代わりに二人連れの男子高校生が、馬鹿笑いをしながら階段を上がってくるところだった。

衝撃を振り払い、男子高校生の脇をすり抜けて下に降りた。

車道ではいつの間にか自家用車やバスが騒音をたてて行き交い、歩道にも多くの通行人の姿があった。幾人かは、立ち尽くす私に怪訝そうな視線を向けた。

城戸の姿はどこにもなかった。朝の雑踏のなかに、彼は消えていた。

歩道橋を見上げた。すさまじい対決のあった橋を。今、その上を男子高校生と、若いOLと、中年のサラリーマンが渡っている。彼らの新しい一日を始めるために。

いつもと変わらない、ごくふつうの金曜日の朝の光景がそこにはあった。

月曜

城戸真澄から最後に葉書が届いたのは、大学二年の冬、年末も押し迫ったころだった。葉書の裏にはイラストが描かれていた。歩いている男の後ろ姿を描いた線画だった。しかしそれはいつもの城戸のタッチとは違い、柔らか

く繊細な曲線ではなく、力強さ、あるいは堅さ、あるいは荒々しきすら感じさせる直線で構成されていた。

背を向けて歩く男の絵の脇に、城戸はただ一言しか言葉を書かなかった。「探してくる」と。それが城戸の私へのメッセージだったのか、イラストのタイトルだったのか、それとも一遍の詩のようなものだったのか、受け取った私は理解に苦しんだ。しかし「探してくる」の一言がいつまでも私の胸に刻み込まれたことは確かだ。

その葉書を最後に、城戸真澄は大学を去り、私の前から姿を消した。そして、十数年がたった。

城戸真澄はそんな男だった。

金曜をどう過ごしたのか、よく覚えていない。生徒に笑われた記憶はないし、宮本華子や学年主任に叱責されたり、木全にからかわれた覚えもないので、なんとかつつがなく一日を終えたのだろう。

その週末は、家に閉じこもって過ごした。

狐につままれた、という感覚を私ははじめて体験した。

この世の中では、金曜の早朝に緑地公園前の歩道橋では何ごとも起こらなかったことになっていた。新聞でもテレビのニュースでも、インターネットでも、それに類する報道は一切なかった。

そのうちに私も、迷うようになった。私はあのととき、とてつもない夢を見ていたのではないか。私はそう感じ始めた。そう思おうとした。

週が明けた月曜、早めに家を出た。JRを二駅先まで乗り、緑地公園前の歩道橋へ向かった。しかし、そこで何も得ることはできなかった。それは、多くの人々の通勤、通学路となっている橋に過ぎなかった。

C公園の土管もまた、一週間前と同じ姿に戻っていた。そこに城戸の姿はなかった。ショッピング・バッグもなかった。ラッキー・ストライクの吸殻も見つけることはできなかった。

それから勇気を奮い起こし、向かいのマンションへ足を向けた。入り口付近ではさすがに緊張を覚えたが、意を決して半地下の駐車場へ降りた。深紅のカルマン・ギアはなかった。五階まで上がって調べてみたかったが、もう505号室は無人であろうという確信があった。

月曜日。一時間目。二年B組の化学の授業。

月曜の一時間目は、やりにくい授業の一つだ。一週間のなかでも遅刻する生徒がもつとも多い。始業後にドアを開けて生徒に入ってこられれば集中力をそがれる。もつとも、私ごときに遅刻する生徒を責める資格はないのかもしれない。

一週間が始まってしまったという憂鬱感を抱きながら職員室を出て、重い足取りで二年B組の教室に向かった。

珍しく廊下に出ている生徒はいなかった。いつもなら、ズボンやスカートが汚れるのも構わずに、廊下にぺたんと腰を下ろして駄弁っている生徒が必ず数人はいるのだが。今日は教室内もかなり静かなようだった。

ドアを開いた。

その途端、どっと大きな笑い声が上がった。

私は狼狽しつつ、教室を見回した。

「うちらが描いたんじゃないからね、先生」

教室の後ろから声が上がった。声を発したのは前田香奈子だった。彼女はにやにやと笑いながら私を見ていた。いや、彼女だけではない。B組の生徒全員が、何かを期待しているような曰くありげな視線を私に向けていた。

「朝からずいぶん楽しそうだけれど……」

私は戸惑いながら言った。

「朝、うちらが来たときには、もう描いてあったんだよ」

「え？」

「浦辺さんがそれ消そうとしたけど、みんなでやめさせたんだよ」

男子生徒の声があった。私は、頭のなかにいくつものクエスチョンマークを浮かべながら、黒板を振り向いた。

チョークで描かれた流れるような線画。数えるほどの曲線がからみあい、そこに男の姿を形作っていた。極度に戯画化された二頭身の男。やせていて、やや骨ばった顔つき。髪はぼさぼさ。どこかで見たことのある顔。

間違いない、これは私だった。片眼と口を大きく開いて、びっくりした表情を見せている。なぜなら、黒板のなかの私の尻に、二頭身の野犬がガブリと噛みついていてから。

——Bye Bye 牧ヤンセ 愛を込めて Kid

そうサインがあった。久しぶりに見る筆跡だった。

私はきつと、絵のなかの私に劣らず大きく眼と口を開いて、黒板を見つめていたに違いない。

「キッド、か」

私はつぶやいていた。なにがキッドだ。私よりも老けた面をしているくせに。

「先生、キッドって誰？」

「女だよなあ、たぶん。おいおい、誰だ、こんなところで告ってるやつ」

「告白じゃないよ、バイバイっていうんだもん。先生、フラれたんだよ。先生フツたの誰？ 白状しちやいなさいよ」

「俺じゃねえよ」

「げえつ、最低！」

一斉にクラスのなか騒々しくなった。

まったく、困ったことをしてくれる奴だ、と思った。野犬は、見事に私の尻に噛みついてくれた。

「なんか先生、めっちゃうれしそうじゃん、フラれたにしては」

前田香奈子にそう指摘されても、私は口元が緩むのを抑えることができなかった。

私はできるだけ平静を装い、出席簿と教科書を抱えようと、机のあいだを通って教室の後ろへ進んだ。そんな私を、生徒たちが怪訝そうに見つめていた。「みんな、悪いけれど、今日はこっちの黒板で授業をやろう。机の向きを変えてくれるかな。あのイラストは、この授業のあいだは消さないでおくよ」意外なほど素直に、生徒たちは私の言うとおりに机と椅子の向きを後ろに向けた。

机と椅子を動かす騒音が収まると、こちらが気後れするくらいに教室が静かになった。

彼らを見渡した。四十余対の眼が、私に向けられていた。眠っている者も、枝毛を抜いている者も、机に彫刻している者も、予備校の問題集やクロスワードパズル雑誌を開いている者もない。

彼らは、私の生徒なのだ。

私は、私の生徒たちに向かって言った。

「はい、授業始めます。瀬田、号令！」

少しの間があった。おやと思うのとほぼ同時に、教室の後ろのドア——私のすぐ横のドアが開いた。

現れたのは、鞆を胸の前に抱えて息を弾ませた委員長の瀬田みすずだった。彼女はつんのめるようにして立ち止まり、きよとんとした表情で前後反対に

変わり果てた教室を見回した。

「あ、あれ……？」

「珍しく遅刻者がいないと思ったのになあ。さ、早く席に着いて。間違えるなよ」

私は笑いながら言つて、出席簿にチェックを入れた。瀬田は、まだきよろよと教室を眺めていた。

「え、はあ……えつと……起立！」

爆笑と同時に、生徒たちが立ち上がった。

そして、私の一日が始まる。

「野犬の道」完